

よつとずつなめると同じように、(4) いじましい態度のように思えるだけでなく、人間は長生きをするだけのために生きているのではないように思われるからだ。

もちろん、死が怖いことには変わりはないが、死を逃れるためにはどんなことでもする、という生き方はどこか間違っているような気がするのだ。事実、どんなことをしても死を逃れようとする人は(b) 軽蔑されるのが普通である。理想や愛のために命を投げ出す人は(ウ) ソンケイされるが、自分が生き延びるためにどんな犠牲も払うような人は軽蔑の対象になるのだ。このように、死を避けることが至上命令とは考えられていないことは明らかだ。

さらに、「死は最も怖いものだ」という考えとは(エ) ウラハラに、たいていの人には、死よりも恐れているものがある。「そういう目にあうぐらいなら死んだ方がましだ」と、死より嫌がられているものは少なくない。たとえば、愛している人に死なれるとか、好きな人にふられるとか、ひとりぼっちになってだから相手にもされないとか、自由を奪われるとか、(c) 屈辱的な目にあうとか、外見をいちじるしく損なってしまうとか、耐えがたい不名誉をこうむるとか、酒が飲めなくなるとか、非常な肉体的苦痛を味わうなど、考えてみればかなりのものが死より恐れられている。死の恐怖に負けて死を選ぶことさえある。

死は、このような極度に嫌なものから救ってくれるという面をもっていると考えられている。どんなに苦しくても、どんなに借金があっても、どんなに恥ずかしい過去があっても、死んでしまえば全部チャラになる。死という「最後の手段」があるから、多くの苦難に耐えられるという面があるのだ。死後、地獄に落ちたとき味わうであろう最大の苦痛は、想像を絶する苦痛を与えられても絶対に死ぬことがない、ということだろう。

このように、われわれは死を本当に最も嫌なものと考えているかどうか、疑問である。

以上を簡単に要約しよう。死に対するわれわれの態度は(d) 錯綜し、矛盾をはらんでおり、簡単に要約できるものではない。

「死ぬことは、寝ころんでいてもできる数少ない簡単な行為だ」ということは吐いた人がいる。だが、死ぬのは簡単なことかもしれないが、死に対するわれわれの態度は決して簡単なものではないのである。

(土屋賢二『汝みずからを笑え』文春文庫)

問一 傍線部(a)～(d)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (a) 供える (b) 軽蔑 (c) 屈辱 (d) 錯綜

問二 傍線部(ア)～(エ)のカタカナを漢字で書きなさい。

- (ア) ユウエキ (イ) シンキョウ (ウ) ソンケイ (エ) ウラハラ

問三 傍線部(1)「不思議に思ったこと」とは具体的にどういうことか、四十字以内で答えなさい。

問四 傍線部(2)「死に対する態度を考えてみると、奇妙な点は他にもある」とはどのような点か、五十字以内で答えなさい。

問五 傍線部(3)「死をめぐる奇妙な点」とはどのような点か、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問六 本文中の内容として間違っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- イ、一番怖いものは何かと聞かれたら、ほとんどの人が死ぬことだと答える。
 ロ、たいていの人には、死よりも恐れているものがある。
 ハ、人間は、長生きをするだけのために生きていない。
 ニ、死は、極度に嫌なものから救ってくれるという面をもっていない。

問七 傍線部(4) 「いじましい」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ、大胆な ロ、けちくさい ハ、せっかちな ニ、愛おしい ホ、現実的な

問八 空欄Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに入る最も適切な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

イ、むしろ ロ、しかし ハ、たとえば ニ、もしくは ホ、おそらく

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「指導する」ということについて、教師から子どもにいろいろ働きかけることについて、(a)遠慮する気風が、戦後たいへん強くなってきました。教師がひとりで話を聞かせる形式も、詰め込み教育のように思われ、遠慮されています。子どもから出てくることばかりに気をとられて、教えるべきことも教えず、指導が(b)疎かになってきているように思います。つまり「教える」ことを遠慮する雰囲気があります。単元学習を勉強している方のなかにも、それが目につきます。

私は、ほんとうに、教えなくてはだめだと思えます。学校は教えるところ、教わり、学ぶところです。学力を養う専門の場所なので、学校が教えるべきことを教えないことには、子どもは、どこで学力をつけたらいいのでしょうか。教えるということが、即「詰め込み」という誤解から、離れないと困ります。

こんな場面がありました。学会の、ある地方の例会でのことでした。その地方の中心になっていらっしゃる、ベテランの女性教師の授業がありました。それは作文のいわば事後指導の時間でした。

まず、自由な題材で作文を書く、それを友だちが読んで、それについて、何かもつこうしたらいいのではないかということを、作者の友だちに手紙の形式にして書く。それによって作者の子どもは、自分の文章の手入れをする、という筋の学習でした。きれいな用紙も作ってありました。

友だちからの手紙を受け取った男の子が、しばらく読んでいましたが、納得したとみえて教行書きました。それは、何か書き足りないと言われたのを、書き加えることになったようです。そこへ教師が回ってきました。男の子はバツと頭をあげて、「先生、書けました。これ、どこへ入れたらいいでしょう」と聞きました。すると、そのベテランの、いかにも温かな雰囲気をもった教師は、もちろん「それは、ここに入れたらいいでしょう」などという、言い方はしませんでした。そこが、子どもたちに考えさせなければいけないところで、(1)この学習の主な目当てでしょう。教師はその子のそばにいて、「それはね、このいい頭で考えるのよ」と言いながら、男の子の頭をクリクリと撫でて、チョンと軽く、指先でたたきました。その仕草がユーモラスで、あどけない感じで、子どもは亀の子のように、つつつと首を縮めてニッコリしました。いかにもうれしそうに、教師の顔を見ました。どこへ入れるかの答えはなくても、十分納得し満足した顔でした。

でも、私は不満でした。Ⅰ「そこまででは、何も教えていないことになると思いました。

「こういうふうに言ったら、どうでしょうか。」「そうね」と言って、子どもの書いたものを、まず読み、「これはね、一段目のあとあたりでいいかもしれない、いやいや四段めのところがいいかもしれない」また少し読み直して、「いつそのこと、おしまいの段落でもいいかもしれない。それは、このいい頭で考えるのよ」チョン。

こうすれば、考えさせるということは、もちろんできます。教えこんだりしていません。そして、考えるためのヒントが出ています。選択肢が三つ出ています。ここか、ここか、ここか。そうすると、自分の文章を自然に読み返し、友だちからの手紙も読み返し、そして焦点をしばって、ぐうっと考えることができるでしょう。どこがいいかななどと、そんな(c)バクゼンとした頭の使い方は、頭をよくしません。ここに入れるか、ここにはどうかと、ぐうとしばって考えることに、集中できるのではないのでしょうか。

子どもに考えさせることを大切にしている、よく考えさせている、と言われる教室の実際が、まだまだ甘いことを(d)サビしく思いました。そして、新しい授業、子どもに考えさせるとか、Ⅱ性を育てるとかという授業が、この程度のところ止まってしまっていることが多いのを残念に思います。ことばの力をつけることは、もっ少し(2)骨の折れることなのです。

(大村はま『日本の教師に伝えたいこと』ちくま学芸文庫)

問一 傍線部 (a) ～ (d) の漢字はひらがなに直し、カタカナは漢字で書きなさい。

- (a) 遠慮 (b) 疎か (c) バクゼン (d) サビしく

問二 傍線部 (1) 「この学習の主な目当て」とは何か、本文中から十五字以内で抜き出なさい。

問三 本文中の内容として間違っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- イ、子どもから出てくることばかりに気をとられて、教えるべきことも教えていない。
 ロ、子どもに考えさせることを大切にしている、と言われる教室の実際ははっきりできていない。
 ハ、教師がひとりで話を聞かせる形式も、詰め込み教育のように思われ、遠慮されている。
 ニ、学校は教えるところ、教わり、学ぶところであり、学力を養う専門の場所である。

問四 傍線部 (2) 「骨の折れる」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ、痛ましい ロ、わくわくする ハ、労力がある ニ、微笑ましい ホ、痛快な

問五 空欄 Ⅰ に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ、むしろ ロ、すなわち ハ、たとえば ニ、つまり ホ、しかし

問六 空欄 Ⅱ に入る最も適切な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ、専門 ロ、自主 ハ、具体 ニ、安全 ホ、遺伝

正答例 & 解説

2022年度 一般選抜【国語】

正答例

- 一 問一 (a) そな える (b) けいべつ (c) くつじょく (d) さくそう
 問二 (ア) 有益 (イ) 心境 (ウ) 尊敬 (エ) 裏腹
 問三 死ぬときになると、自分のことよりも他人ことを考えるということ。
 問四 死ぬという事実は変わらないのに、死期を知っているかどうかでその後の態度が大きく変わる
 問五 人々がそれほど死を恐れているようには見えない
 問六 二
 問七 口
 問八 (I) ハ (II) 口 (III) ホ
- 二 問一 (a) えんりよ (b) おろそ か (c) 漠然 (d) 寂 しく
 問二 自分の文章の手入れをする こと
 問三 口
 問四 ハ
 問五 二
 問六 口

大問	問	配点
1	1	各3点×4
	2	各3点×4
	3	6点
	4	6点
	5	6点
	6	5点
	7	5点
	8	各4点×3
2	1	各3点×4
	2	6点
	3	5点
	4	5点
	5	4点
	6	4点
		合計 100点



大学受験のエキスパート!

が詳しく解説!



攻略ポイント

全体で大問が2題で、大問一は随想で設問数が8問、大問二は評論で設問数が6問。設問内容は、漢字問題、語句の意味を問う問題、空欄補充問題、抜き出し問題、内容説明の問題である。全体的な難易度は高校基礎から標準レベルで、設問は基礎的な学力を問うものであり、難問レベルのものはない。漢字の読み・書き、抜き出し、選択問題を含む記述式で出題されている。文章は比較的読み取りやすい内容であり、大問一の随想は3000字程度で標準的な文量であり、大問二の評論は1500字程度でやや短めの文量である。設問については、正確に文章内容を読み取る力を問うものである。学校で学習する内容を理解して、丁寧に文章を読み、設問に対して正確に解くことを身につけよう。そのうえで、びわこ学院大学短期大学部の過去問題を解いて準備しよう。過去問題は必ず時間をはかり、2回以上解いて、読むスピードや解くスピードといった時間配分を確認しておこう。

大問一

問三は内容説明の問題である。傍線部の次の文から、その具体的な内容が説明されている。しかし、字数指定が四十字以内であり、内容を圧縮して表現する必要があるため、すべての内容を盛りこむことはできない。そこで、必要な解答要素に優先順位をつけ、同じ内容のカブリを集約してコンパクトにまとめよう。本番までの記述練習として、「自作答案を作る→解答例を確認する→解答例と見比べて不足している要素を確認する→解答例を見ないでもう一度自作答案を作る(答案のリライト)」の手順でトレーニングをおこなおう。決して解答例を写しただけで満足することはないようにしよう。

問六は内容合致問題であるが、「間違っているもの」を選ぶ点に気をつけよう。このタイプの問題では、本文内容と〈明らかに反しているもの〉が正解であることを意識する。正解「二」は、本文の終盤(傍線部(c)の次の段落の冒頭)の内容と明らかに異なる。選択肢をチェックするときに、何となく選んでしまうと迷ってしまうことがある。しかし、客観的な読解が求められる国語では、本文に「書かれている」ことを根拠にして選択肢の正誤判断をするように心がけよう。

大問二

問一は漢字の書き取り問題、問四は語句の意味を選ぶという問題である。国語の基礎知識を問うものであり、おぼえていれば正解して合格に近づくことができる。「失点しない」ということを意識して、日ごろから継続しておぼえていこう。

問三は、「間違っているもの」を選ぶ点に注意する。本文根拠にもとづいて客観的に選ぶ必要があるため、誰が見ても「間違っている」と判断できる選択肢が正解である。口の選択肢は、最終段落1文目「教室の実際が、まだまだ甘い」という内容に明らかに反する。

問六は、前後のつながりを確認して判断する。空欄IIの直前「子どもに考えさせるとか」に着目して、「～とか、～とか」という同じ方向性の内容が入ることから、口「自主」性に決まる。空欄補充の問題は頻出なので、試験本番で正解できるように練習をくりかえしておこう。